

月は東に

安岡章太郎

新潮社

月は東に

発行 昭和四十七年一月五日

二刷 昭和四十七年三月二十日

定価 五五〇円



© Shotaro Yasuoka
Printed in Japan, 1972

著者 安岡章太郎

発行者 佐藤亮一

印刷所 塚田印刷株式会社

製本所 新宿 加藤製本株式会社

発行所

郵便番号一六二

東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 〇三(260)二一一一(大代) 振替 東京八〇八

株式会社 新潮社

月
は
東
に

第一章

日附變更線をこえると、時計の針が逆にまわり出したのかと思うことがある。夜明けと日没の太陽が海のまんなかで出会って、東側ではたたいま沈んだばかりのお日さまが、朝日になって上りはじめる、かとおもうと同時に、西の方では朝焼けの空がそのまま夕暮れて暗くなり、いつか星もない夜空になって、われわれのまわりに垂れこめている、といったふうなのだ。

こんな奇妙な現象は、実際に眼のまえに見えていても、ほとんど誰も氣をとめて怪しんだり不思議がったりはしない。ただ内心に何で戸惑わされともない異様なものを、それとなく映したまま通り過ぎて行くだけだ。もともと時間だの日附だのが場所場所で変って行くのは、ヨミをお日さまの動きに合わせてきめてあるせいで、それは土地によってお日さまの照り方が違ったり、地面に出来る影がさまざまの大きさや恰好に映るのと、まったく同じリクツだろう。……ですから御覧下さい。我が社の最新式自動捲き腕時計も、文字盤は日時計の意匠と同じ円型をしており、長短の針は影法師を長くひきのばした形を何処に残しております。これは

現在世界でも最も長い歴史と伝統を誇る時計製造会社である我が社の……♪

笠山宗太郎は、前の座席のポケットのパンフレットをひろげて、時計会社の広告の文字を、うつろな眼で追いつながら、そういえば自分の頭もゼンマイ仕掛の時計のモーターと同じように太陽の運行と全然噛み合わないままに、何枚もの歯車が額の内側でゆっくりと回転しているような気がした。

もちろん日時計は場所をうごかすわけには行かないものだから、時差も生じるわけがない。宗太郎はアート紙のパンフレットの、花壇にかこまれた石畳の日時計のカラー写真を眺めて考えた。……しかし何にしても、その頃は時間も土地柄や風土に結びついて生きもののように伸び縮みする自然の一部だったに違いない。それが、そうでなくなったのは時の流れが、巻き上げたゼンマイの戻り具合で置きかえられ、数字だけで考えられるようになってからで、時差というヒズミも出来てきた。日差は、つまり時差のヒズミのしわよせが、地表の何処かにあつまって出来た大きな裂け目のようなものだろう。そんなことを宗太郎は、横のものを縦に置き換える自分の仕事に何となくなぞらえながら考えるうちに、ふとまた日差は時差の集まったものかどうかはわからなくなった。一日はどんな時計ではかり直したって、一日であることには変りないわけだし、べつに二十四時間たつたびに次の日になるものではないからだ。

つまり、地べたに映るお日さまの影を何処まで追い駆けてみたって、何処かで一日が突然消えてしまったり、同じ一日が二度繰り返したりするところを、つかまえるわけには行かない。しかし、日附はタダの約束事で都合次第に何とでもきめられるものだとしても、夜が明けてから暮れるまでの一日は、決して架空な約束事ではなく、實在のものであるはずだが……。宗太郎は、昼とも夜ともつかぬ混沌とした灰色の空だけが流れる窓の外を、ぼんやり眺めつづけていた。

機体と空気との摩擦音が、固い気圧の石畳の上をこいし磔がハネルような震動と一緒にあって、絶えず小刻みに全身につたわり、体のシンまでしみこんでくる。手荷物で足の踏み場もないほど詰った狭苦しい座席に、縛りつけられた恰好のまま何時間も坐っていると、時間も空気も自分の周囲に貼りついて不動の壁みたいになって来る。あれから、どれぐらいたっただろう？ 機内燈がいっせいに点って、重く濃んだ空気を白っぽく照らし出したが、乗客の大半はまだ眠っている。

列の後ろの方からワゴンの音が眠そうに響いて来た。宗太郎は隣の席の妻の怜子を振り返った。天井や壁に反射する光が眩しいのか、怜子は眼を閉じたまま眉根にシワをよせて、目蓋を

二、三度びくびくさせると、小柄な体を腕組みしながら、そのまま背を倒した椅子の毛布に埋まって眠りつづける様子だった。しかし宗太郎がいくぶんほっとしたように正面を向きなると、あっちこっちで座席の背を立てたり、坐ったままノビをしたり、そんな物音や目を覚ました客たちの気配が聞え、それは次第に増して来た。ワゴンが止り、宗太郎は座席の背板のテーブルをひろげて、プラスチックの食器に丸や三角のサンドイッチなど盛った盆を、妻の分と二人前、並べてのせた。すると、あとから日本人のステュワーデスが胸にかえた包みを配りに来た。が、それはもう小さなテーブルにのせるのは無理だった。

「これは……」

宗太郎は受けとった包みを二本膝の上にのせたまま、置き場がないのに戸惑いながら、どうしたらよからうか、と無意識にいいかけると、丸顔のステュワーデスは八重歯の覗く口許に微笑をうかべ、

「おスシでございます」

と、突然子供じみた陽気な声でいって、そのまま踊るような足取りで前の客席の方へ行ってしまった。いくらかアッ気にとられていた宗太郎は、そんな後ろ姿を見送って思わず口の中でつぶやいた。——まるで「ウサギのダンス」だ。

實際、宗太郎にはそのステュワードスの制服姿が師範附屬か何かの小学生そっくりに見えていた。と同時に彼は自分がこの何箇月かのあいだ、おそろしく背の高い大きな男や女ばかりに囲まれて暮して来たことを憶い出し、振り返るとそれはまったく嘘みたいに架空なものに思われた。つまり大人国を旅行して来た小人の錯覺に、おれ自身もいつの間にかはまっていたのだろう。しかし、そう思うはたから宗太郎は、座席のテーブルの上で小刻みな震動をつづけているプラスチックの盆の食餌と、膝の上の包みとを見較べながら、

《朝食

朝食は、洋風ならびに和風の軽食を御用意いたしました》

とあるメニューと照らし合せると、その白いカードの上に、自分の内部にうつったものと外部に見えているものとが、二種類の現実として二た通りに書き並べられているような氣もした。宗太郎は置き場にこまつた膝の上の包みを、とりあえず一つだけでも片附けておこう、と紙包みをほどこいて、紅シヨウガの紅のにじんだ経木の包みをひらいた瞬間、不意に胸のつかえるような重苦しさに襲われた。食欲とも、機外の現実の時刻ともかわりなしに、単に飛行時間の経過だけから割り出された朝飯で、生理的に戸惑わされたというより、経木の中に黒いノリ巻きが並んでいるのを見ると、それだけでドキリと胸を突かれた。桃色のデンプを芯にしたノリ

巻きは、太くてズングリしており、湿った黒い海苔の切り口から白い飯粒がはみ出しかけている。それは不器用なシロウト臭い手つきを想わせると同時に、大人国の都会の片隅に吹き寄せられたように集まって俯向いたまま黙々と箸をうごかしている黄色い額を浮び上らせた。

そして、そのことが宗太郎にヌキサシならぬ切迫した現実の事態をおぼえさせた。つまり、来るべきものが来たわけだ——。宗太郎は指先にベタつくノリ巻きをつまみながら、つぶやいた。もうすぐ何時間かで、不如意な異国の生活はおわる。が、そこからさきに何が起るか、どんなことが待ちかまえているか、一切わからぬ闇の中へ返って行くことになる——。宗太郎は自分に言い置きながら無理矢理、包みの中のスシを二つ三つ、飲みこむように食った。

口でも動かしていなければ、何かを考えずにいられない。それがいまのおれには最も苦痛なことだ。考えたって、いまさらどうしようもないし、そんなことで頭を悩ませるのは無益に自分を苦しめるだけのことだ……。そう思って彼は、四列に並んだスシの一列目を矢継ぎ早に平らげると、まるで何かに追い駆けられる気持で二列目に手をのぼした。しかし、それをつまみ上げたとなんに、饅^すえた台所の流しのような冷たい臭いが鼻先をかすめて、もうスシはこれ以上、どうがんばっても食えないとわかると、包みをさるめて座席の外側の床に押し出しながら、何げなく窓の方を眺めやった。その瞬間、思わず彼はギクリと眼を外向けた。……混沌とした

濃淡の気体が流れているだけのはずの暗い窓の外に、ぼんやりと男の顔がうつって、こちらを見詰めていたからだ。

ハッとしたのは一瞬だけで、じつはそれは先刻から急に明るさを増した機内の光が窓のプラスチック・ガラスに反映して、それに自分の顔がうつただけだ、とは宗太郎もすぐに気がついたが、垣間見た男の陰鬱そのものの顔つきを憶うと、もう一度そっちを振り向いてみる気にはなれなかった。

黒いソフト帽の前鰐まえつばを下げて、太いロイド眼鏡の目がほとんど隠れてしまうほど目深にかぶり、胴を細いヒモのようなベルトで絞め上げる古い型のレーンコートの襟を立てて、その襟元に顎を埋めるように顔を俯向けて立っている。これはあの男、片桐の得意のポーズだった。つまり若い頃、流行した服装とともに身につけた姿勢が、年とっても肉体にシミこんで、一種の性格になってしまった、若げの気取りから生涯、脱け出せない男……。そんなことを宗太郎は、一瞬のうちに奇妙にアリアリと頭に浮べていたのだが、ことによればあれは気取りから生じた性癖というより、何か怨念じみたものになってあの男に取り憑いているのではないか、とふとそんな気もした。実際、宗太郎が窓を眺めて思わず眼をそらせたのは、あの男の顔がそこに覗いていたからというより、顔のまわりに黒い影が、ちょうど片桐のレーンコートの褪めた白っ

ぼい布地に滲んだ垢のように全体を薄暗くくま取って、それが或る不吉な執念のようなものを覚えさせたからである。

あの男は空港で、おれを待ち受けているだろうか――？

宗太郎はつぶやいて反射的に、まさか、と思う。どんなに最悪の場合をあれこれと考えてみても、そんなことになる確率は、ほとんどゼロだった。しかしそう思うはたから、げんに自分が陥って苦しめられている状況を考えると、それは全部普通なら起り得ないはずのことが、実際にはいくつも重なったことから起っていた……。それを想うと宗太郎は、この世の中に起り得ないことというのは何一つないし、ましてあの男が、こちらの帰りを待ち兼ねて、家でジツとしていられず、飛行機から下りたばかりのところをイキナリ掴まえて面罵してやろう、と空港の何処かで網を張っているくらいは、いくらでも有り得て不思議はなかった。

もし、そんなことになったらどうしよう――？

しかし、その対応策は宗太郎には全然思いつかなかった。空港の廊下を両手というより全身に大きな鞆や荷物をさげた自分が、汗みずくになりながら、砂丘を上るショウガク坊のように懸命に足を運んでいる最中、不意に呼びとめられて振り向くと、そこに人目を避けるように黒い影みたいになって、帽子の鍔を深く前に傾けた片桐が立っている、そんな場合を想像すると、

宗太郎は対応策どころか、応答一つ出来そうもなかった。たぶん、おれは棒立ちになってその場で荷物を落すだろう。その拍子に鞆のフタがあいて床一面にちらばった中身を、おれは四つん這いになって拾い集めなければなくなる。それは単なる空想ではなくて、実際に起り得ることだった。もし片桐が空港に出て来ていれば、必ずそんなふうな事態が起る。しかし、その片桐が空港へ出て来ることを止める手段は、いまの宗太郎には全然なく、もっぱら片桐の氣持次第によることだった。

宗太郎が片桐を怖れるのは、彼があの男に重大な負い目を持っているせいでも、もし自分さえシッカリしていれば、何もこんなに怯える必要は勿論ない。ただ、そうだとすると宗太郎が、あの男の黒い帽子と垢じみたレーンコートに、或る不吉なものが湿っぽい臭いをたてて漂うのを感じたのは、たぶんこういうことがあるからだ——。こんど出掛けた大きな国で、宗太郎は地方の町の陰気なアパートに閉じこもったきり、ほとんど何処へも出ずに暮したが、一度だけその大きな国の一番大きな都会に短時日旅行して、遊覧バスで市内見物したことがある。数十階建ての建物がぎっしり詰って立て込んだ街は、どこもかしこも深い井戸の底かトンネルの中にでもぐったように暗く、真っ黒く煤けた鳩が一日中電燈のともった窓の外で鳴いていた。

バスが或る町角をまがると、石造の建物が城砦のようにつらなつた一郭があり、日が当たっているのにヘンに森閑として薄らさむい道路に出た。——あれは一体、何だろう？ 或る建物の前の石段に男が仰向けに倒れて寝ているのを、宗太郎はバスの窓から眺めて思った。説明役を兼ねたバスの運転手は、それについては何も言わず、倒れた男の前を普通速度で走りながら、ここは世界最大の株式取引所の町で一日の扱い高はいくらいくら、と手短かに説明しただけで通り過ぎた。しかし、それは何という奇怪な情景だったろう。運転手の説明をきいて、しばらくたってから宗太郎は、そこが有名な“城壁街”と呼ばれている通りであることを了解したが、石段の上に寝ころんでいるのは、あの男一人ではなく、まわりの石畳の上にも、壁の下にも、道ばたにも、あっちこちに同じような男たちが何人も、寝そべったり、しゃがみこんだり、ぼんやりと突っ立ったりしている、そんな連中が日に照りつけられたまま、誰にも無視され、周囲とは無関係にジッとたむろしているのは、何か白昼の舗道に幻影を見るおもいだった。あの連中はまったく何者なのか？ まさか株で失敗した投資家や仲買人たちのナレの果て、というわけでもないだろう——。ただ宗太郎は、ウツロな眼をした彼等の顔に、ふと今世紀前の中葉にこの街を襲った“大恐慌”の有様が、静止した影絵のようにうつて見え、三十数年後のその日の黄ばんだ舗道の上にも、まだ黒ぐろとうずくまっている気がした。